## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title            | アイユーブ朝とシシリー: サラディンとシシリー   |
|------------------|---|
| Sub Title        | The Arrubids and Sicily (I)   |
| Author           | 湯川, 武(Yukawa, Takeshi)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1971  |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.89- 95                                    |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 特集東西交渉史   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0089 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アイユーブ朝とシ シリー

サラディンとシシリー

Щ 武

支配が終ったのちも、この関係は維持され、特に文化的・ 書研 究からも明らかである。シシリーにおけるムスリムの 文化の各方面で、シシリーと密接な関係をもっていた。た とえば、 アイユーブ朝に先だつファーティマ朝は、 商業上の両者の深い関係は、Goitein のゲニザ文 政治・ 商業

商業的関係は密接であった。

字軍勢力に対抗するムスリム側の指導者となった。すなわ プトにおいて権力を握り、続いて えた。サラディンは、 の死後は、 ィンの抬頭などの要因が、 しかし、 シリア・パレスティナ方面の支配権を得て、十 十字軍の出現、 ファーティマ朝の没落後、まずエジ ファーティマ朝の没落、サラデ 両者間の関係に深刻な影響を与 Nur al-Din b. Zangi

> 者たらんという野心をもっていたのであるという。 いたのではなく、 とった。ウィリアムは十字軍運動にも、当然、 ヨーロッパと聖地との連絡の安全確保のことだけを考えて ムの領域に派遣したとき、彼はシシリーの貿易のことや、 Chalandon によれば、 その政策の基調は領土拡大主義であったといえよう。 た。しかし、 け継ぎ、 のウィリアム二世は、その父のウィリアム一世の政策を受 九年まで続くから、ほぼサラディンの治世と一致する。と る。これに対し、シシリー王国では、一一六六年にウィリ アム二世が即位している。ウィリアム二世の治世は一一八 ち、十字軍にとって最大かつ直接の敵となったわけである。 六九年であるが、スルタンとなったのは一一七一年であ サラディンがエジプトで、 ローマ法皇を支援し、反神聖ローマ帝国の態度を 彼は単なる十字軍支持者であるだけでなく、 レバントにおける全キリスト教徒の保護 ウィリアム二世が、艦隊をムスリ 事実上、権力を握ったのは一 熱心であっ

註

1 正しくは、Salāh al、Dīn であるが、慣用にしたがい本論では

サラディンとシシリーアイユーブ朝とシシリー関係史

第一章

史

アラビア語文献引用の場合も「サラディン」と書くことにする。(2) Chalandon, F., "Chapt. 8(B) The Norman Kingdom of Sicily," in the Cambridge Medieval History, vol. 5. p. 198. 1964 (Cambridge).

(∞) ibid. pp.199-200.

(=

述べているように、ビザンチンがサラディンに警告を与え Gibb は、このシシリー艦隊がアレクサンドリア沖に現れた。 Gibb は、このシシリー艦隊がアレクサンドリア沖に現れた。 だ、と述べている。この 遠征に 関して、ビザンチン 皇 帝 た、と述べている。この 遠征に 関して、ビザンチン 皇 帝 た、と述べている。このような事情から察すると、Gibb の 別区による両者間の不和のために、ウィリアムはこの申し 原因による両者間の不和のために、ウィリアムはこの申し のによる両者間の不和のために、ウィリアムはこの申し のによる両者間の不和のために、ウィリアムはこの申し はベているように、ビザンチンがサラディンに警告を与え

Ibn al-Athīr などは、この点については何も述べていない。一方、イタリー諸都市とサラディンの間の友好関係は、サラディンが前もって、シシリー艦隊の来攻を知っていたという説を支持する。いずれにしても、シシリー艦隊がアレクサンドリア沖に現れたときには、サラディンは力イロに滞在していた。

ィンの送った援軍が近づいていると知り、三日目で攻撃をドリアを攻めたが、守備側の抵抗に遇い、その上、サラデれば、上陸後シシリー軍は攻城器などを使ってアレクサン

放棄し、艦隊はアレクサンドリアを離れた。

al-Athīr はこの点について さらに詳しく述べている。 者たちを捕えたのを知らずに、この艦隊を派遣した。」Ibn フランクに頼んだ。そしてその代償として金や土地を割譲 派を奉ずるファーティマ朝の残存勢力は、 バ ィンは熱心なスンニ派の信奉者であり、バグダードのアッ によれば、シシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃は、 たためである。 フランクに、 の艦隊の派遣の理由は、 Ibn Wāsil 口 転覆を計り、 このシシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃の理由として おける反サラディン勢力の陰謀と関係がある。サラデ ス朝カリフの支持者であったが、これに対し、 は次のように述べている。「このシシリーから(8) エジプトに攻めて来るように、と手紙を書い 外部からの援助を、 シシリー王は、 エジプト人がシシリー王及び他の サラディンが手紙を書いた シシリー王やシリアの サラディン政権 シーア カイ 彼

> れ、処刑されてしまった。 首謀者 'Imāra b. Abī al-Hasan 以下主たる者は捕えらすることを約束した。しかしこの計画は未然に発見され、

と連絡をとったということは、 深く、 **\$** al- Imād al-Kātib もまた後代の Abu Shāma も Maqrīzī はっきりと Ibn Wāṣil と Ibn al-Athir とによって指 ファーティマ朝とシシリー もし確かに、この陰謀とシシリー国王が関係あるとしたら、 中にシシリーも入っていると考えてよいかどうかである。 何らかの連絡をとったことは確かであろう。 以外の者も認めているので、シリアの十字軍諸国、 いない。しかしサラディン打倒の計画者たちが、 いのは不思議である。 されているが、他の同時代の史料には何も述べられていな 「フランク al-Firanj」という語を広義に解釈して、 とのように、反サラディン陰謀とシシリー王との関係は シシリー王とこの陰謀との関係については何も述べて ファーティマ朝の没落後も、 Ibn Shaddad ノルマン王朝の関係は非常 Ibn al-Athir Ibn Wāsil 何らかの信頼すべき連 Ibn Abi Tayy 問 題 フランク は 諸候と その ح の 摘

史

絡の経路をもっていたということになる。

## ì

- については史料により多少の違いが見られる。(1) ヒジュラ暦では五六九年 Dhu'l-宮ija 二三日。この日付
- ( $\alpha$ ) Gibb, H.A.R., "Chapt. XVIII The Rise of Saladin" in A History of the Crusades, ed. by Setton, vol. 1, p.566, 1955 (Philadelphia).
- (α) Runciman, S., A History of the Crusades, vol. 2, p. 403, 1952 (Cambridge).
- (4) al-'Imād al-Kātib は、この艦隊のニュースについてはすでに広まっていたとだけ述べている。—Abu Shāma, Kitāb al-Rawḍatayn, vol.1 pt.2, p.598, 1962 (Cairo).
- (15) Ibn Shaddād, tr, by C.W. Wilson, Life of Saladin p. 67, 1897 (London). Runciman, vol. 2, p. 403.
- れている。 Abū shāmā は三万人といっているが、これは明らかに誇張さ(6) 例えば、兵員について、Ibn al-Athīr は五万人といい、
- (7) アイユーブ朝時代の歴史記述については Historians of the Middle East, ed. B. Lewis & P. H. Holt の中の"Some Notes on Arabic Historiography during the Zengid and Ayyubid Periods""The Arabic Historiography of the Crusades"を参照。
- ∞) Ibn Waşil, Mufarrij al-Kurūb, vol.2, pp.11-12, 1957

(Cairo).

(Φ) Ibn al-Athīr, al-Kāmil fi'l-Tārīkh, vol. 9, p. 123, 1967(Beirut).

· (三)

Zangī 死後のシリア統一及び十字軍との戦いに忙しく、一方ウィリアム二世は一一八三年のコンスタンティノープル症服計画に見られるように、ビザンチンとの衝突に精力を領し、両者がエジプトないしは、シリア・パレスティナででかするということは、一一八八年に至るまでなかったとり、一十七四年の接触以来、サラディンは Nūr al-Dīn b.

陥落させて、十字軍を孤立化させる作戦をすすめていた。などの主要な都市を直接攻撃せず、その周辺の地域を順次に入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリ、Sūrに入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリ、Sūrに入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリ、Sūrに入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリ、Sūrに入ってもなおサラディンの活動はやまず、トリポリとを中

ることになった。 の進軍の途中で、サラディン軍は再びシシリー軍と衝突す らに北上し Marqīyya から Jabala を目指して進んだ。 (一一八八年五・六月) この Marqīyya から Jabala へ (Tartosa, Antarsus) を攻略したのち、サラディンはさ 滞在ののちに、直ちに沿岸地方へと進んだ。Antartūs 八八年五月にサラディンは一旦ダマスカスに戻り、

士を乗せていた。 この艦隊は 域に居るシシリー艦隊をトリポリに派遣することにした。 また彼自身は、直ちにビザンチンと和解して、キプロス海 の君主たちに、新たな十字軍をおこすようにと誘いかけ、 サレム王国崩壊と、十字軍の窮状を憂い、他のヨーロッパ それより前に、ウィリアム二世は、一一八七年のイェル Margaritus に率いられており、三百人の騎

リポリを離れ北上した、と述べている。彼はヨーロッパ史 強されており、攻略するには時間がかかると見たので、ト ポリに向ったが、この地が、このシシリー艦隊によって補 Lane-Poole は、サラディンはダマスカスから一旦トリ

サラディンとシシリーアイユーブ朝とシシリー関係史

第一章

用されている Ibn Shaddad も一致して、「トリポリに来 価を下している。al-'Imād al-Kātib も Ibn Wāṣil に引 サラディン軍と衝突しなかったにもかかわらず、充分に救 トリポリにシシリー艦隊の救援部隊が来たために、サラデ というのは、シシリー艦隊がトリポリで何の役にも立たな る。この点ではアラビア語史料に誇張があるようである。 たシシリー艦隊は何の役にも立たなかった。」と述べてい このトリポリにおけるシシリー艦隊について、全く逆の評 料を使って上のように述べているが、アラビア語史料は、 援軍としての役目を果したということになる。 向う作戦をとったのであろう。そうするとシシリー艦隊 したとは一言もいっていない。これらの諸点から考えると しかし両者とも、サラディンがこの時に、トリポリを攻撃 かけたが、その時、何の役にも立たなかったと解釈出来る。 かったということは、サラディン軍がトリポリに攻撃をし ィンはトリポリ攻撃を一時撤回して、他の比較的弱い所

ってきていた。そこへ北上中のサラディン軍が その後、この艦隊は一度Surに行き、またトリポリに戻 Hospital

史

(九四)

## 註

から奪い返した。

1 Chalandon, p. 199. Runciman, vol.2, pp. 428-429.

は、

ね、ここにノルマン王朝は終りを告げた。

- (a) al-'Imād al-Kātib, al-Fath al-Qusi fi'l-Fath al-Qudsi p.121 以下 1888 (Leiden)
- 3 Runciman, vol.3, p.4.
- $\frac{4}{4}$ Lane-Poole, S., Saladin, p. 245, 1964 (Beirut)
- 5 al-'Imad al-Katib, op.cit., p.134
- 6 Ibn Wāṣil, vol. 2, p. 257.
- al-Imäd al-Kātib, p. 135 ibid., p.584. Ibn Shaddād を引用している。

(四)

の最後の接触となった。第三十字軍に熱意を燃やしていた て の al-Marqab での接触が、 サラディンとシシリー軍

> ら艦隊を引きあげざるを得なかった。そして、その後は リーは政治的混乱におちいり、ウィリアム二世のあとを継 事態は一層混乱するばかりであった。そして一一九四年に Hohenstaufen 家が、シシリー王位継承に介入してきて、 キリスト教諸侯の介入などに対抗するため、シリア沿岸か いだ Tancred は、南シシリーにおけるムスリムの反乱 ウィリアム二世は一一八九年十一月に死去し、 神聖ローマ皇帝のヘンリー四世がシシリー国王を兼 その後シシ

もたずに終ったが、これはサラディン時代のアイユーブ朝 三十字軍と講和を結んだのち、一一九三年に死んだ。 情勢に直面しなければならなかったが、一一九二年に、第 サラディンは、 一方、サラディンは、第三十字軍の到来により、新しい シシリー国王とは、 一度も政治的交渉を

ジプトなどの地域を、 において、分裂状態にあったシリア・パレスティナ及びエ サラディンの功績は、特に一一八六年に至るまでの時期 一つの共通の目的をもって統一しえ

の基本的な性格をよく表わしている。

な脆弱さが、彼の軍事的成功を助けたという点も見落せなずることは出来ない。また、十字軍そのもののもつ基本的して、彼の軍事的な指導者としての能力という点だけで論たということであり、彼の軍事的成功は、このことを無視

ンドリア攻撃の失敗の例の中に見い出すことが出来る。シリーとの関係の中にも、はっきりと読みとることが出来る。シシリー艦隊のアレクサンドリア攻撃失敗も、フラン原因がある。またラテン諸国とビザンチンとの関係もサラディンにとって有利に作用していたことも、このアレクサーとの関係の中にも、はっきりと読みとることが出来がよったとの関係の中にも、はっきりと読みとることが出来がいかくの如き、サラディンの歴史的評価は、ごくわずかのシールくの如き、サラディンの歴史的評価は、ごくわずかのシールとの関係の中に見い出すことが出来る。

量が、比較的少ないのは、サラディンの直接の敵は、シリえんがためか、誇張があるように見られる。そして記事の性の高いものであるが、時として、サラディンの功績を讃語史料は、現場での証人の記録が残っているために、信憑サラディンとシシリー軍の接触を論じている、アラビア

史家たちは公平だったといえよう。に接触が少なかったのであるから、この点に関しては、歴ア・パレスティナの十字軍諸国であり、シシリーとは実際

大な変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマンば、サラディンの死後、アイユーブ朝はその政策に重う。
また、サラディンの基本的な政策が一層はっきりするであろう。
大な変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマン大な変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマンが、大な変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマンが、サラディンの発体が、この点を明らかにすれ

といえようが、これについては稿をあらためたい。 大な変更をもたらし、一方、シシリーの関係は、al-Malik エ朝が亡びるに及んで、その基本的性格を変えた。サラデ 工朝が亡びるに及んで、その基本的性格を変えた。サラデ を変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマン は変更をもたらし、一方、シシリーの側でも、ノルマン

註

(1) サナディンの評価については H.A.R. Gibb の"The Rise of Saladin"(Chapt. XVIII, A History of the Crusades vol.I)を参照。

(九五) 九五